国際研究論叢　27（3）：1～12，2014

太陽神統治体制の基盤の生成
－ヴィエスワフ・コタンスキ著『日本の神々の遺産』意訳・その２－

松　井　嘉　和*

The Making of the Base of Uranokracja (Establishment of the Sun-Goddess Rule)
– Free translation of a chapter of the Dr. Kotański's main work explaining his understanding of the KOJIKI –

Yoshikazu Matsui*

Abstract

The late Dr. Wiesław KOTANSKI (1915-2005) at Warsaw University has been studied in the KOJIKI throughout his life-time. This paper is free translation from the fragment of his main work entitled "Dziedzictwo Japońskich Bogów" (Heritage kept in the Japanese Deities).

He insisted that the messages for the better life, which might be meaningful even in the modern world, are left in the KOJIKI could be found by analyzing the epithet of the deities appeared in the KOJIKI. In this chapter of his book, which Matsui translated here, he is analyzing the cosmic meaning of hierophany of the three noble deities and deciphering the meaning of the name 'amaterasu-'ofomikamï.

キーワード

古事記、三貴子、太陽と海の出現、アマテラス、ヒルメ

＊まつい　よしかず：大阪国際大学国際コミュニケーション学部教授〈2013.11.6受理〉

翻訳

太陽神統治体制の基盤の生成

－ヴィエスワフ・コタンスキ著『日本の神々の遺産』意訳・その２－

松井嘉和

はじめに

本稿は、ポーランドの日本研究の今日の隆盛の基礎を築いた故ヴィエスワフ・コタンスキ博士（一九一五～二〇〇五）のライフワークであった『古事記』の解読の集大成である"Dziedzictwo Japońskich Bogów"（日本の神々の遺産）の一節を、同博士の『古事記』の解読、言い換えるとその『古事記』の理解を紹介すべく、意訳して紹介するものである。

同書の概要は、本紀要第二十四巻第二号に発表した「すべては混沌から始まる」の「はじめに」で記述した。「すべては混沌から始まる」は、同書の第Ⅱ部第二章だったが、本稿は第Ⅲ部第一章である。

第Ⅲ部　天の統治体制の黄昏すなわち太陽神支配体制の基礎の芽生え

Ⅲ．1．三貴子

Ⅲ．1．A．太陽と海：体系の出現

沐浴のただ中にあった造物主である伊邪那岐命は、禍津日神そして直毘神に続いて墨江三前大神の三柱の神々を生んでいる。しかし、これらの神々は、造物主の最後の子孫でもなく最も重要な子孫でもなかった。沐浴はまだ終っていなかったのである。この沐浴の時に三貴子 sankishi つまり「三柱の高貴な兄弟の子」として知られている三神が出現し、その中の二神はその後の神話の物語の中で最も重要な役割を演じることになる。『日本紀』に拠れば、三神の一柱の子もやはり重要な役目を果たすと考えられたが、世界構成のその後の物語からは外された。

神々の出現をもたらした場つまり禊がなされた海という環境は、そこからとくに生まれた三貴子のうちの二神が普通に呼ばれている太陽と月という名に相応しいとは思えない。もちろん、太平洋の海岸地帯の東の方向に太陽と月が観察されて、大洋からの出現というイメージが投影されたのだと論じることもできるだろう。また、結局、この三柱の霊的存在は、異国の文化の導入として海の彼方からやってきたのではなく、海水を浴びることによって生まれた者として構想されたのだと考えることも可能だが、そのような推定には堅固な根拠が欠けている。

その一方で、この場面から世界の支配権を行使するに際しての海の影響という問題を取り上げることができるかもしれない。ここまでの物語では、支配権は天に属していたので、この『日本の神々の遺産』という拙著の第三部のタイトルに「天の統治体制」

uranokracjaという言葉を使っているのである。

大地は、ある意味では天の期待に応えられていなかった（すくなくともある時期には）。程なく確実に正常に戻るのだが、形をなすことができていなかったので、天の支えとなることもなかったのである。

天上の神とくに伊邪那岐命は、宇宙構成の元素である水に拠り所を求めていた。群島国の住民にとって、このような観念は、まったく自然のことだと思われる。神話は、ヤソマガツヒとオホマガツヒの神々が生まれ、続いて、カムナホヒやオホナホヒやキツノメという意識的に行為を正す神と修正の力を保つ天的な神々が生まれているように、まずはじめに地下からの穢れを浄化することに関心を払っていた。さらに続いて、ワタツミという神が現われ、海が食料や水などの貴重な物を維持させる保管者としての特質を示している。海が行為やその行為をもたらす力を正しくする能力を有することを示しているのである。そして、何よりも墨江三神のすべてが豊饒の海域へと通じる信頼できる道筋を示しているのである。

この一連の提言から導き出される結果には以下のことがある。

海は大地と言われる領域が確実に秩序だっていて平安であることを確信させている。とくに日本列島ではそうである。太陽と月は、深い海から毎日出現することによって、激しく揺れ動く巨大な水の世界からマナを得ている。マナとは、太陽や月が担っている使命から導き出されている天の下の地域での任務の遂行を可能にさせる力である。

ここで言及している神々の太陽と月に関する使命について、今日まで日本の宗教研究で言われてきていることは、神道の考え方にも即していて、太陽神はその父である造物主から天下の支配権を委託されていることが示されているという見解である。それは、ある程度しか言及されていない月に比べて太陽がもっとも多く語られて、太陽の支配的な立場が強調されることに基づいている。

『古事記』と『日本紀』の研究者の大半は、なお以前と変わらない考えをしている。記紀神話が構成されたのはあまり古くはないので、歴史研究の対象でもあるのだが、神話の構造に興味を示す歴史家の声は今なおそれほど多くは聞こえてこない。例えば、伊勢の太陽神信仰は六世紀の後半になって導入されていることや神話の中での太陽の物語は太古のものではない（直木孝次郎 一九七一）など、歴史家は古典の史料の中から否定的にみる神話の部分を強調することが目立っている。その研究は、民族の最古の伝承を復原するという非常に重要で興味を呼ぶ試みであり、『古事記』の神話を再構築することでもあると考えて良いのだろうが、今日までまだ適切な研究に至っていないし、その研究によって多くの問題点がかならずしも全て研究されたわけでもないし、従来見逃されてきた最近になって論点とされている問題も出てきている。

八世紀のこの文献の中の神話から知り得ることの一つは、おそらく理解しがたい混乱が支配していた古い神話の原資料をどの程度に秩序立てることが可能だったかを示すことであり、また、もう一点は、散乱している個々の物語の合理的な分析方法を示すことである。というのは、『古事記』に見られるような整理された話の流れそのものに基づいて、その方法を実行することができるからである。今日まで、方法論もなく勘によって全部の物語の筋道が散漫に扱われていて、その結果、凡庸な過誤やお門違い等々が出てきているのである。

本稿では、他の様々な研究によくあるように、一定した言葉で説明できる明らかな方法の結果としての客観的な真実を求めている。ただ、研究の対象は『古事記』の文献神話でなければならないのであって、次の段階になれば、そこで初めて別の異なった古典の内容に関心を払うべきである。

研究方法論的にもっとも明白なのは、所与の文献はそれぞれ独自の研究対象であるということである。だが、それは、Ｂという別の一つの文献の分析が、Ａという文献の問題の理解に役に立つことがない、という意味ではない。困難は、文献Ｂが文献Ａが述べていることを詳細に覆すときに生じる。そのような場合に出くわすのは希ではないが、むしろ、二つの対峙することを同時にはっきりと対照させることは困難を客観的に解決させる方法となる。そして、Ｂの内容が選ばれるときには、文献Ａの研究に周到な正当性を与えておかなければならない。このような場合には、分析が少なくとも一面的で粗忽に行われないことを周知させるために、基礎とする『古事記』文献の周辺とされる他の文献に言及されるだろう。

太陽が水という元素との合同あるいはむしろ一時的に協同することについての記録は、『古事記』の一つの物語から直接に知られることである。太陽が水と結びつくのは確かにあやふやなものがある。しかし、太陽が水の中で生誕していることは否認できないし、神話では原因や結果つまり因果関係がなければ何事も生じることがないのが普通だから、ここでの禊と太陽との結びつきが偶然の関係ではないことの説明が偏に望まれる。

はるか太古の時代には、太陽が水中から姿をあらわす周期性の問題が自覚されて、それが神話の中で、太陽神が造物主の左の目から出現したことと結びつけられたのだろう。さらに、太陽が天空という屋根を日々移動する現象は周知のことだった（日本語ではｆｉ日という言葉によって「太陽」と「日々」が明示されている）。そこで、太陽は身を隠して休息した後で再び姿をあらわすのだ、と考えられていたと推定してもよいのではないか。人間のように、休息の後に力を取り戻すのだ。また、ここから、休息が深い海の中で行われるという結論が考えられるかもしれないが、我々はそれを知ることはできない。いずれにせよ、神話のあらゆる事柄はほとんど常に周期的に活動していて、神話の物語はある一定の周期で繰り返され、そのことが神話の永遠性を保証するのである。

ここでは、太陽の絶え間なく繰り返す活動の復活が海の助けによって達成され、太陽が活気に満ちて統治という面で関わってくるのである。

天が海と一時的に関係をもつことによって、天と地という体系に変化が起こって、太陽と海という新しい体系に実際の活力が生み出されるのである。海はその体系の中で何かを補強する要素をこの世にもたらす役割を演じている。この補強活動は、月もまた自身の領域で担っている。だが、月は太陽よりも狭い活動範囲が与えられている。と言うのは、月は、全世界を輝かせる力もないからだ。また、同じ海は、『古事記』によれば、風雨の神と考えられる太陽の臣下としての神を生んでいる。この神は、明らかに造物主の「三貴子」の第三位であり、また太陽と海の体系における登場者となっている。

このような三頭政治は地上を統括する効果的な体制として考えられ、それが秩序をもたらすはずであり、造物主の使命がそのようにして継続されることになっている。

婚姻関係の非道徳的な分離の後で、イザナギは、罰を被らなけ

ればならなくなる。その罰とは、新しい神々の出現により設計者の立場から降ろされるという宇宙における激変ということである。つまり、イザナギは、程なく話題にされなくなり、自分の意志とは無関係に継続していく出来事の消極的な証人であり続けることになる。

以上が「三貴子」に関する神話の全体的構図だが、この神話全体が様々な異質な要素と意図的に融合されたものだとの判断に容易に辿り着いているように、他の注釈者たちは、その構造を現実に取り出したり描写したりすることができていないことを知る必要がある。

『古事記』の物語は、確実に太安万侶による編集作業に帰することができる制作方針で作成されたことは明らかだが、同時にまた、それらの部分部分の物語には『日本紀』や『風土記』などに記録された地方地方の多くの伝承が以前にあって、いわゆる『古事記』の物語に一貫性がないという批判は、『古事記』を表層的に研究していることの証明となっているだけである。と言うのは、『古事記』の本文は明らかに八世紀に作られた作品なのだが、太古の口承伝承を創造性もなく寄せ集めた評価に値しない作品とされている。だが、物語の構成の規則・原則の存在の想定はまったく非難に価せず、ただ解読が必要とされるだけなのである。

その一方で、もしその解読に興味がある人がいれば、このように文字化された神話がある具体的な歴史的出来事を代表しているのかどうかと思いめぐらすことも可能である。また、例えば、よりよい世界をフィクションとしてあこがれることが書かれていると考えたり、神話はいつも歴史とつながりがあるのかどうか疑うこともできるだろう。

さらに、いまここでは、想起され得る地方的な伝承に言及しておくべきだろう。それらの伝承は、『古事記』に伝えられた神話と、多かったり僅かだけだったりするが、ともかく結びついているのであって、非常に興味を呼ぶ内容であることが多い。また、『古事記』の物語に照らして編者が確信をもって無視することにした全く異質の物語にも言及する意味がある。なぜなら、朝廷の命令によって、編者の太安萬侶は校訂する権利を持っていたのだから（『古事記』の序文には次のようにある。「天皇詔ラサク、朕聞ク諸家ノ齎テル帝紀及ビ本辞、既ニ正実ニ違ヒ、多ク虚偽ヲ加フト、今ノ時ニ当リテ其ノ失ヲ改メズハ、未ダ幾ノ年ヲ経ズシテ其ノ旨滅ビナムトス、斯レ乃チ邦家ノ経緯、王化ノ鴻基ゾ、故、惟レ帝紀ヲ撰録シ旧辞ヲ討覈シテ偽ヲ削リ実ヲ定メテ、後ノ葉ニ流ヘムト欲フト」）。

以上のように「帝紀や本辞の誤りを正す」という安万侶が全面に委任された仕事には急がなければならないという要求があった（指図された版から手書きの版を作るまで四ヶ月）。このような類の仕事は、細目にわたって核心をつき、きちんと綿密に分析されたものではないだろうという理解を可能にする。むしろ、物語の骨組みに合致しているという原則に則って、肯定的に扱われ、その一方で、それに抵触すると思われるところは否定的に評価すべきだとされてきた。今日まで、このように極めて多い「不都合な」情報が残されたままでいた。だが、そこから正しくするという発展的展開を確立することは、並はずれて困難なことだが、ありそうなことの境界と真実への入り口とを誤らないことは、以上のような研究によって、成果へとかすかにつながっている希望がある。今のところは、あらゆる証明をありそうな結果に結びつけたい。

実例を挙げるために直木孝次郎の著作の主題に若干の注意を向

けよう（『神話と歴史』一九七一pp195-252の太陽神の政治的役割に触れた部分）。『古事記』に伝えられてきている神話の内容の関係からはかなり離れた研究であるが、神話でその役割が急に拡大しはじめている太陽神が、その役割を達成する前に実際に歩んだ長い道のりを示してはいる。『古事記』の神話の体系は、その役割が世界を統御する計画の最良のモデル、理想的計画を示している。というのは、その成功は天から送られてきた造物主の意志を保証しているからである。

だが、直木孝次郎は、『古事記』の作者がある意味では世界のより良いビジョンを広報しているのだという可能性については考えていない。むしろ直木は古代におけるまったく功利的な文筆活動について注目している。例えば、特権やだれか他人の利益のためにするところがある場合、それは、しかし、作品の同じ内容から導き出されたのではなく、作者の経過がまだ心理的局面を含んでいるし、異質な要素がそこに加わって、研究者にとって、その要因を究明することを困難にしている。同じように、作者の経過の主題を定める仮説の程度は、―『古事記』の場合はそれがひじょうに高い―行われたことの研究にできれば限定したいと思わせている。

直木は、四世紀から五世紀の転換点に先立つあらゆる報告を歴史的に信じがたいことだとみなしている。なかでもとくに、伊勢の神宮の創建と紀元前三世紀に（ただそれはしばしば四世紀のことだとすら考えられている）太陽神が天上から下りついたという『日本紀』の伝承を否定している。しかし、太陽神が伊勢も含めたさまざまな地域で崇拝されていたことを認めている。いずれにせよ、伊勢では伊勢の大神（「東南の方角を司る役割を担う神」）が信仰されていたし、また伊勢津彦（東南から吹き寄せる驚嘆すべき風の流れを活気づかせる夫）また神風・大神（神々にとって好都合となる風の移動を託された）も知られていた。

神名のこれらの解釈は、上記の書物の著者から出されている。直木は、全くそのような意味を示していない名前を原典の綴り字の中からの名前を示しているだけである。

五世紀の後半に、東南方面の政治的意義（当時、現在の大阪港の地域に首都が企画されている）が伸展しはじめていて、アマテラスがそこの中心の神である王朝の信仰の中心地としての伊勢が注目されるようになった。伊勢からの神を東南の王朝と統一させることは同時に最初の信仰をもたらした。時が経つにつれて（六世紀以降）最初に計画されて中心となっていた王朝の計画を造り出したのであって、その信仰は中臣一族と同族で行政の中で同等の地位にあった荒木田神主が流行させている。

Ⅲ．1．B．　アマテラス：名前と役割

海水の中で左の目を洗ったことにより世界に太陽の神格が出現したことはすでに知られているので、左側に出現していることがより高い威厳と尊貴を保証しているということが留意すべき重要なこととなる。また、この神の父である造物主イザナギが、動機がはっきりとした抱負をもってその子を授かっているように、どんな状況でその神が出現しているかを総括的に認識するときに、名称の分析にとりかかることができるのである。神名とは、宇宙におけるその神の使命が記号化されたもので、宇宙におけるその神の取り組みの後戻りできない道を標示しているものである。

『古事記』の本文でこの神は四通りに表示されている。その中で最も頻繁に出てくるのが'Amaterasu'ofomikami アマテラスオホミカミであり、他方、それより少ない頻度で

出てくるのは ˈAmaterasuˈofokami アマテラスオホカミ と ˈAmaterasuˈofomikami-nö-mikötö マテラスオホミカミノミコトそして Fi-nö-kami ヒノカミである。この最後の神名は、この神を「太陽の神、太陽神」として太陽と同一化させることができることを読者に明らかに示す情報となっているので、これ以上の検討はしないつもりである。この名については、その他の三つの名前の意味が特定できない場合にだけ言及して、関心を払うことにする。

言うまでもなく、我々は現在、表意文字の意味を考えて、文字記号学的に表層的な解釈を問題にしているだけである。と言うのは、この名は、ˈa$^{\downarrow}$ma$^{\downarrow}$-te$^{\downarrow}$ra$^{\downarrow}$su^{2}-ˈo$^{\downarrow}$fo$^{\downarrow}$-mi^{2}-ka$^{\downarrow}$mi$^{\downarrow}$（天＋照＋大＋身＋神）「天で照らしている偉大で純粋な神格」、ˈa$^{\downarrow}$ma$^{\downarrow}$-te$^{\downarrow}$ra$^{\downarrow}$su^{2}-ˈo$^{\downarrow}$fo$^{\downarrow}$-ka$^{\downarrow}$mi$^{\downarrow}$（天＋照＋大＋神）「天で照らしている偉大な神格」、ˈa$^{\downarrow}$ma$^{\downarrow}$-te$^{\downarrow}$ra$^{\downarrow}$su^{2}-ˈo$^{\downarrow}$fo$^{\downarrow}$-mi^{2}-ka$^{\downarrow}$mi$^{\downarrow}$-nö$^{\downarrow}$-mi^{2}kötö$^{\downarrow}$（天＋照＋大＋身＋神＋之＋尊）「天で照らす偉大で純粋な神格となるべき定められた聖なる存在」という意味で、純粋に記号論的に考えても太陽について言及していることが明白で、疑う余地はほとんどないからである。

だが、名称のこの理解には疑念が残るし、例外的な明白さがかえって何か隠された意味があるのではないかと考えさせ、その何らかの意味に辿り着くことを困難にさせているのではないかという推定が私には生まれている。古代の聖なる書物の本文には表面の意味の背後にもっと核心的な別の意味が隠されているのではないだろうか。その理由は明記されていないが、その明らかな表意文字の意味は信仰者の意識であって、表意文字の背後にある意味は秘密の分かる人だけに関わりをもつことになっている。結局のところ、それは日本人にとってまさに二重の意味のある名前なのであった。私は、表意文字の意味とは別の形で翻訳することによって、日本語でない読者に対して、この二重の意味を意識させなければならなかった。

広い範囲の人々に強く根を下ろしている信念を壊すのは愉快なことではないのだが、太陽の誕生に関する日本の神話は、太陽についてだけではなく、宇宙体制（世界の統治に関係している）についてのことも含んでいることが知られているのだから、神の名前に表面の奥にある使命を示している何らかの要素が隠されているかどうか、一貫性のある研究をすることが必要となる。思うにそれは語呂合わせの形で暗号化されたのではないだろうか。すなわち、アマテラス ˈa$^{\downarrow}$ma$^{\downarrow}$-te$^{\downarrow}$ra$^{\downarrow}$su^{2} は ˈa$^{\downarrow}$ma$^{\downarrow}$-te$^{\downarrow}$ra$^{\downarrow}$su^{2} → ˈamaterasu（遍－照）→ ˈamaterasu →「すべてを照らし出す」（このˈamat 遍という解釈は、『古事記』の冒頭部分を解読したとき、すでに ˈamatuti 天地の解釈で認めてきた）。照「照らし出す」には次のように多くの意味がある。「わかりやすくする、明快に見せる、本当の光の中にかざす、真実に光を当てる」等々で、ここではさらに敷衍させた意味として「顕在化、発覚、露呈等々」と理解できることに気づかされる。この照らすという言葉から、「一つの太陽」の下での専制的な王の支配で要求の多い集中的権力の役割が明確に概説されている。その太陽の光は（指示でも命令でもある）実際のものであり、すべての人にとってひとつの規範であった。ˈAmaterasu という名をもつ神の太陽のような役割をとくに強力に強調するこのような専制的で全体主義的な教条は、当初の計画でもその後にも除かれていたと考えることもできる。しかし、この太陽の要素は神話物語の中で総じて十分に発展しなかった。ˈAmaterasu が重要な役割を果たしている神話物語は、主に絶対主義的な計画と志向から構成されているのである。

名前のその他の部分つまり ˈo$^{\downarrow}$fo$^{\downarrow}$-ka$^{\downarrow}$mi$^{\downarrow}$ は、筆者がすでに検討

した方法（例えば、本書『日本の神々の遺産』の「第Ⅱ部－第17章　造物主の対偶関係の断絶以後に世界を担う者」でイザナギという名称を検討した箇所で言及している）と同じような分析で構わない。そこで、「意欲のある神、何かを気にかける神、ある方向性を担った神、何らかの義務を背負った神」等々という意味になり、ˈoˈfoˈ-mi²-kaˈmi:ˈ という形態を広げていくと、ˈoˈfoˈ-wu²mi²-kaˈmi:ˈ（負埋神）→ ˈofo-mi-kaˈmï（意欲を秘めている神）となり、これは神名の構築者がともかく内々に全体主義的な意図を扱っていて、何とかそうした傾向に反対する人々の不安に気づいていることを見事に裏付けている。厳密な検討のために、wumi 埋という語がまた「遮る、塞ぐ、満たす、覆う、埋める、おしつぶす、圧縮する」というにニュアンスをもっていて、この意味から「為すべき課題に覆われている神、責務をいっぱいに負っている神」という結果が導き出されるが、この名ではこの文脈の箇所に相応しいとは思えない（働きを負うことは「義務」ではなかったし、また、どの程度「圧倒された」のか疑問が残る）。理解を確実にするために、この神の名の全体を以下のように示すことができる。ˈaˈmaˈtaˈ²-teˈraˈsuˈ²-ˈoˈfiˈ-wuˈ²-miˈ²-kaˈmi:ˈ ㅌ　多・照・覆・埋・御・神 → ˈamat-terasu-ˈofo-mi-kamï → ˈamaterasu-ˈofo-mi-kamï で「全てを照らし出す意欲を秘めている神」という意味になる。

西宮一民は『古事記』（一九七九）で ˈamaderasu（同氏に依ればこう読むという）とは、神々の殿堂の「最重要の神」であることを意味していて、主要な部分である ˈofomikamï の前の修飾部分としての構成要素だとはっきりと述べている。彼は、それが主要なイザナギもしばしば ˈofomikamï として表されているが、その時でも主要な部分となっていないことを指摘する。しかし、その解釈にはあまり得心がいかない。神の部分で私が近接表示と名づけた属名の部分である nö-mikötö は ˈaˈmaˈ-teˈraˈsuˈ²-ˈoˈfoˈ-miˈ²-kaˈmi:ˈ-nöˈ-miˈ²köˈtöˈ という名に現れている部分で、墨江之三前大神の tutunöwo-nö-mikötö という名に関する彼の議論と同様なので、ここでは言及しない。

『古事記』の神名は、この世界でその神が担う役割の説明のために、他のあらゆる文献と結びつけずに考慮されるようなある程度の自律性があると指摘することができる（つまり、『古事記』の作者は神について語るとき、その名前の中に含まれていること以上には、多くも少なくも言及しようとはしなかった）と思われる。この姿勢は、名前の異なる形態は異なる文献に残されているということが想起されているように、注釈者達の決まった儀礼的な姿勢となっている。神の他の名前は、話題にする神の役割を理解するために何か新しい情報をもたらしているのかどうかを知るために考慮されるだろう。とは言っても、西宮一民が列挙している七種類の名前から、-ˈamatr という構成部分がある『古事記』の中で用いられている形態素に直接結びついている四つの例だけを厳密に検討しよう。さらに、その構成要素はなくても、アマテラスオホミカミという形態と対比できて、それらと同程度の意義のある同義部分を外観的に注意を向けよう。

祈祷の時の言葉である祝詞 norito にはアマテラシマシオホカミ（真ん中部分のマシは通例はマスと読まれるのが習慣になっているが、それに十分な根拠があるとは思えない）について、綿密な根拠の提供はさておき、最もうまくいった解釈を読者のために言及しよう。それは、ˈaˈmaˈtaˈ²-teˈraˈsiˈ-maˈ²siˈ²-suˈ²mëˈ²-ˈoˈfiˈ-kaˈmi:ˈ → ˈamat-terasi-masi-sumëˈ-ofo-kamï → ˈamaterasi-masi-sumëˈ-ofo-kamï となって、意味は「すべてに光を与え、先頭に立って統治する意欲をもっている神」となる。名前のこの形態は、この神の

『古事記』に見える名前よりもはるかに精確にその志向を示している。

次に、例として『万葉集』にある名前が触れておく価値がある形態である。それは'Amaterasufirume-nö-mikötö である。firume という構成要素は、さらにいくつかの文献に表われていて、その意義も「太陽の女神」や「太陽の女性聖職者達」さらに「太陽の妻」（この場合、太陽そのものは男性と言うことになってしまうのだろう！）と様々になる。

ところが、firu を「太陽」と訳すことは疑問を生み出してくる。『時代別国語辞典』（一九六七、六〇二頁）によれば、例えば、firu kuru（正確な表現の fi kuru「日が沈む」に変わる表現）や könö firu（könö fi「この日」に変わる表現）などの語法は誤りだという。これは、具象的な意味（「太陽と日にち」）と抽象的な意味（日が差している時）とを両極化させた結果である。多分間違いなく、fi-wiru「太陽がある、常在する、しばしばあらわれる」あるいは fi-yiru「太陽が到達する、到着する、入る、中に落ちる」という合成語は、凝縮されて firu となって、そのとき、me「媼、女性呪術師、女性聖職者」は「太陽がしばしばやってくるところの女性」や「太陽が運行のおかげを得ている媼」であることが判明しているし、さらに西郷信綱によれば、「媼のことで、そこで太陽が運行していて、その女性が妊娠する」（一九七六、二二四頁）と説かれている。こうして、結局のところ、この名の全体は、以下のような意味となる。'a^{1}ma^{1}ta^{2}-te^{1}ra^{1}su^{2}-fi^{2}-yi^{2}ru^{1}-me^{3} → 'amat-terasu-firu-me → 'amaterasu-firu-me「太陽の運行を担って、全てを照らす媼」。これで、一人の神自身の太陽と統治の機能とに関係を持つことになった。

その名が記録されはじめた九世紀以前に、神楽歌として知られている祭礼の歌の中に書きとどめられている名前は、内容的にほとんど同一である。神楽歌は、「希望をもたらしてくれる歌」であって、これについては、天と地の儀礼的関係を論じたこの『日本神々の遺産』の第Ⅱ部第九章で論じている。そこには、'Amateruya-firume-nö-kamï とあり、次のような分析が提言できる。'a^{1}ma^{1}ta^{2}-te^{1}ru^{1}-wu^{2}ya^{2}-fi^{2}-yi^{2}ru^{1}-me^{3} → 'amat-teru-ya-fi-iru-me → 'amateru-ya-firu-me「太陽の運行を担って、全てを照らす尊貴な媼」。名前の最後に置かれる属名である kamï（書写された原典では誤って kami 上と書かれている）、それが人格化された神であることを示している。

これ以外に、『日本紀』に出てくる変形した形態 'Amaterasu'ofofirume-nö-mikötö はほとんど気づかれない程度の相違である。その異形態の主要な部分は、欧州の言語の表記からは明瞭にならないが、「女性のシャーマン、女性聖職者」の意味のあるあまり使われない漢字である雯 me が書かれている。me^{3} という形態と同じような意味のある別の漢字を吟味することが有意義な解釈に影響があるかどうか議論の対象となる。つまり、もし「女性のシャーマン」という意味の二十画以上もあるめったに使用しない漢字に「女性」という意味を示す通用している簡単な漢字を置き換えてみるならば、漢字がその成分から理解する意味を記号化して示しているのだと考える必要が生じる。それは、その文字の意味に固執すること、使用漢字の必然性を信じることになる。そこからは一体何が明らかになるのだろうか。何もないことは、天の神太陽神の分析の仮説ですでにはっきりしている。ここでは、完全に太陽に支配されて奉仕する女性が見て取れ、その場合には yiru は yöru（従属している、憑依した、取り憑かれた）の異形態（kiru と köru 切る・樵る、niru と nöru 似

るを参照）として扱うことになる。そして、名称全体の分析は、ˈ^{1}ma^{1}ta^{2}- te^{1}ra^{1}su^{2}- ˈo^{1}fi^{1}-fi^{2}-yi^{2}ru^{1}-me^{3} → ˈamat-terasu-ˈofo-firu-me → ˈamaterasu-ˈofo-firu-me（森羅万象に光を注ぐ意志をもっているシャーマンの太陽によって取り憑かれた女性）。そこで、こうして姿は次のように正反対に変わってしまう。神から自身の中に留まっている聖霊の意志を実現させる仲介者の役割を果たす巫女になる。こうした手順でこの世のあらゆることが実行されているのであって、巫女たちに向けられた崇拝によって、巫女は死後に神格化されたのである。

神の名前に示される巫女の性格に関しての決定的な証拠となるのは、『日本紀』で定義されていて、本章で二番目に取り上げている ˈofofirumenömuti という名である。今ここですでに言及している様々な名称の中で、この名は、ˈamaterasu が現れていないし、末尾の mikötö が muti に代わっている。この後者の成分は古代ポーランド語にある「（我らが）威厳、高貴、慈愛の人、（我らが）陛下」などと同種の表示として最も頻繁に解釈される言葉で、現在は、全体で「太陽の巫女に憑依した聖なる威厳」（o^{1}fo^{1}-fi^{2}-yi^{2}ru^{1}-me^{3}-nö^{1}mu^{2}-ti^{2}→ ˈofo-firu-me-nö-muti）とされる。

ただし、私は、以上の解釈が最終的なものとも最上の解明案だとも考えてはいない。また別の提案も考えられる。それは、ˈo^{1}fo^{1}-fo^{1}-fi^{2}-yi^{2}ru^{1}-me^{3}- nö^{1}mu^{2}-ti^{2}→ ˈof-fo-firu-me-nömu-ti「太陽が憑依した最上位の巫女が（その名に）表明する威力」である。ここに仲介者としての唯一の役割が明示されていて、それによって一層高い力が伝えられているのである。

この観点からは、万葉集の中の太陽神（ˈAmaderasukami「天から光明をまき散らす神」と Sasinöbörufirume-nö-mikötö「太陽となる天上の浮遊者」）の詩的な典型的な言い換えの二つの定義が無視されているのだが、それらがなくても、一致しない五種の提案は十分であることが証明できる。解釈の一つの典型に違いないエウヘメリズムの検証から始めて、人間の歴史的神格化ではない形跡、人間の神格化の程度の大小などを検証する。

古事記の編者は確かにすべてを網羅していなくても、吟味する名の大半を承知していたので、言及しない名称を即座に決めて、ˈamaterasu を論拠として検討しなければならないただ一つの構成要素として扱ってきた。

五種の名称の中でヒルメ firume をもった例が『古事記』に見えないことは一考すべきだと思う。ヒルメという名で、巫女の神格化として女神を示すためはっきりした志向が、『日本紀』には十分にその役割とともに表現されているわけである。安萬侶はそんな解釈を信じていなかったか、あるいは一層高度な基盤の新しい宇宙の統治者を据えるために、そんな「痕跡」から離れたかったのだろう。結局、極端に分岐した伝統を単純な構図へと導くことは、不適切あるいは「許しがたい」注釈の危険性を減少させるために、必要なのだと気づかせることになる。こうして神名の多様性が明らかにすることもできるだろう。

こうした努力によって、整合性そしてある意味では誤った結論の防止が見えてくる。こうした予防的な姿勢は効果が薄い。なぜなら、もっとも高度に全体性の性格をもった体系の『古事記』に一本化した思想を期待することは難しいからである。だが、安萬侶は、きっとその問題を別のように理解していた。

太陽神についての論議に比較的に広い範囲に冷静に光を当てている情報源である西郷信綱の一九七五年の『古事記注釈』（第一巻pp224-230）と一九八八年の安津素彦と梅田義彦の『神道辞典』（pp225-226）の助けを借りれば、この問題についての何らかの総

まとめができると思う。

生きた組織体にとって必要な温さと光の信仰の表明だと自然神話解釈のように考えるのは十分ではない。そのような崇拝を示している日本の習慣はそれほど目立って多くはない。農村社会では、降る雨と山から流れてくる水（これは山の崇拝の広がりと関係がある）により深い重要性を感じている。古代の日本は、アジアの大陸の国々とは対照的に、日本を fi-nö-mötö（太陽の始まり、太陽の本拠地、太陽が出てくる場所）（起き上がる、東）と考えられていて、太陽の神話は、日本の政治思想を呼び覚まして指標となっていて、神話の体系化の原則を生みだしている。西郷は、その神話から結果的に生じている政治体制の定義に、マックス・ミュラーの太陽崇拝という用語を利用している。皇室が太陽にその祖先の母を認知していたので、周囲の状況は太陽崇拝という用語に好都合となっている。結局、血統主義の考えが、太陽主義の理想の実現の第一歩の構想となったのである。だが、それを結論付けることは容易ではない。

王朝をめぐってのことは、「太陽の拠点」の軍事的脅威の大きな可能性をもった国家機構が大陸で機能していたことの問題なのであったと思われる。例えば、fina-mori 鄙守（野蛮人からの防衛・対馬という島に置かれた）という役職があったり、saki-mori 防人（国境の防衛）（九州北部に置かれた）という軍事的監視所があったことは、その証拠である。その結果、当然に、自分たちの国家の強力化の必要が生じていた。その時代にはまだ完全にはそうなってはいなかった、'Amaterasu の神話が国家を導いていくある方向性に多くの指標を提供した。結局、それが理想的な指標となって、それをもって現実には適用されなかったが、体面上は扇動のように打ち出されたのであった。現代の今日までに、この女神信仰には変遷がある。温かみ、光明、寛大さ、配下の人の尊敬の意志などだが、ほとんどすべての場合、秩序をもたらし、こうした美点に欠けている地域に安寧をもたらす天賦の能力を賞賛しているのだ。また、無秩序を嫌う気持ちの役割を無視することはできない。それは、混沌を隠しだてすることを防ごうとする監視の実力者に任せて関与を認めることであり、女神がこの世界に出現した目の神話に象徴されている。そして、後に地上の支配を成就した自分の孫に与えることになる鏡を、自分自身だとして崇敬させるために与えている。そのあらゆる周囲の情況の誰が日本神話におけるこの形態での役割を道理にかなっていると納得することができただろうか、と西郷は付言している。

津田左右吉と直木孝次郎の立場を疑問もなく受けいれることは難しい。彼らは、八世紀の日本の政治的安定化に必須の論拠の提供が目的の政治的な処置をした古典としてほとんど全部の神話を考えていたと総じてみなすことができる。しかしながら、正統化の根拠が、宗教的教義の神学的な帰結としてこの古典の表現の中に残されていて、それが俗世界のこと、一国の国家の範囲に影響を限定し、自身の国家の制度化のような教義を扱っていた、という指摘は疑問である。しかも、神政政治のような国家体制への出発点の観念としての以上のような教説（それが神話に含まれている）は、直木が説くように神話に仮託された政治体制とはまた別のことである。例えば、古事記がそうであるように、教説の文学的な形態というのは、組織が誤りなく機能するように社会を組織化する模範的な原則を無作為に表明しているのであって、確かに言えることは、神話制作者とその人たちと同時代の読者にとて直接の経験である周知の社会的現実とは対照的なある種のユートピアであると認識することは必要なのだろう。しかも、それは、公

開といえる方法で与えられることはめったになかった。さらに、ユートピアは現実に関する事柄の理想化であり、かならずしも政治体制を指示するプロパガンダだと言い切れないのであって、むしろ神話は、ユートピアの作者の考えでは、現実の政治家が自分自身の方向性の肯定面を確信しての主張である。よりよい世界の構築は可能だという確かな原理を描き出してはいるのだが、理想の実現にはまだ遠いのである。